

〔書評〕

池上秋彦著

『国語史から見た近代語』

一

はじめから私ごとで恐縮だが、娘がまだ高校生の時だったから、もう十年も前になるが、池上さんの論文が拝見したくて、学校の図書館で借りてくるように頼んだら、貴重本扱いということで、担任の先生が、わざわざコピーして持たせてくれたことを思い出す。本書の第一章におさまっている「江戸語資料としての江戸小咄」である。

このように読むのに苦労するものも含めて池上さんの論文が一冊にまとめられたことは、近代語を研究する者にとって、たいへん喜ばしいことである。

本書の構成は「近代語の諸相」「語法の諸問題」「語誌あれこれ」の三章からなり、おわりに「あとがき」と「主要語彙索引」がついている。各論文の初出文献一覧は、「あとがき」の中に収めてあり、初出時の記述にはなるべく手を加えず、「追記」の形で最小限の補正に止めたという。

二

第一章は、狂言本の人称代名詞についての二編の論考にはじまる。いずれも一人称・二人称の代名詞の現われ方を、一方は大蔵虎清本について、他方は驚流狂言本について調べたものである。それぞれの時期に発表された論文なので、無理な注文ともいえるが、こうして一冊の本に並んでみると、両者の間の異同について説明がほしいところである。

続いては、咄本の用語・語法・音韻についての四編の論考が「江戸小咄について」のタイトルでまとめられている。咄本のことばには、文語的なものや上方系の要素が混在しているので、江戸言葉の資料としては、たいへん扱いにくい。そのため、現在でも、まだ十分に考察が進んでいないが、本書に収められている論文などは、その点で先駆的なものといえる。

最初の「江戸語資料としての江戸小咄」では、その上方語的な性格と江戸語的な性格とが丁寧に分析され、続く「江戸小咄に見る江戸語三題」では、中世語との関係にも目が向けられている。

たしかに、池上氏のいわれる通り「従来の江戸語研究者たちが、

田 中 章 夫

その資料として用いてきたものは、ほとんど洒落本・人情本・滑稽本に限られていた(二〇九ページ)。それは、ひとえに、池上さんが本書で示した「咄本の料理法」が未開拓だったからにはかならない。一つ例をあげると、本書一一五ページで、「浮世床」の「一步禪へ付てもをかしし、為方がなくて(二編・上)」の「をかしし」と一見同類とも見える、咄本の「やかましし(今歲斬)」や「悪(あし)し(民話新纂)」について、その性格がつぎのように考察されている。

形容詞の終止「——しし」の例が鎌倉・室町時代から江戸時代初期にかけてはままた見られるということ、および江戸小咄の二例「やかましし」と「あしし」がいずれも会話文でなく地の文に現われていることを考えに入れて、これを古い形の残存とするのが妥当だと思われる(一一五ページ)。

こうした検討を経たうえで、さきの浮世床の「をかしし」は、咄本の「やかましし・あしし」とは「明らかに別の性格のものである」としている。たとえ同形・同類と見えても、咄本の例を江戸語に結びつけるには慎重さが求められることを示した論考である。

三

続く「四、洒落本に見られる遊里語」は、深川・品川・新宿の三つの岡場所のこぼれをとりあげて、対称の人称代名詞や敬語形を論じたもので、遊里語の研究としては、一風かわった論考である。岡場所の遊里語については、湯沢幸吉郎『廓言葉の研究』をはじめ、主として吉原のそれとの異同を中心に論じられることが多かった。

本書では、むしろ、とりあげた三つの岡場所相互間の異同に重点がおかれ、吉原の影響の強い品川・新宿に比べて、深川の遊里語には

独自性が認められるとしている。おびただしい数の用例の検証から導き出された結論であり、結論そのものは、まず動かしがたいものであるが、ただ、深川独特の遊里語とされているものうち、「ナハル」は別として、「ワタイ・テメエ・ナセエス・ゴゼエス」など、町方のことばに近い形が、かなり見うけられる。これも、深川の遊里語の一面の性格を物語っているように思われるが、どうだろうか。

「五、「古今和歌集鄙言」について」は、尾崎雅嘉の「鄙言」の口語訳と、本居宣長の「遠鏡」の訳文を、「あゆひ抄」に見られる古今集の和歌の訳と比較して論じたものである。古今集に用いられている十六種の助詞・助動詞をとりあげて、右の三種の口語訳を比べると、「鄙言」の訳は「遠鏡」に近いとする。「鄙言」を「遠鏡」の剽窃とする見方を否定しているわけではないが、「つつ」の訳に、動詞をくり返す形を採るなど、「鄙言」独自の訳に光をあてている。

「六、「五大力恋緘」について」は、一七九四年(寛政6)の大版初演時の台本と、翌年の江戸初演時の台本とを比べ、そこに反映している、当時の上方語と江戸語の語法の対応の様子をとらえようとしたものである。一般にいわれる「打消のヌ／ナイ」「断定のチャ／ダ」「因果関係のサカイ・ホドニ・ニヨッテ／カラ」などの対立が、両者の間で、どのような様相を呈しているか、刻明に調査されている。上方生れの台本という資料上の制約と、江戸語そのものが上方系の要素をまだかなり保っていた時期ということもあって、その現われ方は、たいへん複雑・微妙で興味深いものがある。なかでも、本書二三五ページには、形容詞の原形とウ音便形の対応について、

連用形原形が用いられている例としては、すべて武士を発話者として、両本共通に現われている。

として、上方本「早く行きやれ」に対する江戸本の「早く行きやれサ」などの例がとりあげられているが、武士ことばに見られる、上方本・江戸本の、こうした共通性の指摘は貴重である。

ページ数三七〇を数える、第一章は「七、人情本について」でしめくくられている。これは、人情本に現われた自称・対称の人称代名詞と待遇表現とを扱った、一〇〇ページを超える論考である。まず、人称代名詞については、人情本に登場する男女の待遇意識を分析して、丁寧さの段階づけが試みられているが、資料は、前半は「仮名文章娘節用」「春色梅児譽美」など代表的な人情本をとりあげ、後半は「閑情末摘花」「花筐」といった天保末期のものまで含めて扱っている。

著者自身も、本書三〇七―三〇八ページで述べているが、採集された人称代名詞自体が、前半と後半では大きくズレている。自称で両者に共通するものは「拙者」一語で、「ほとんど完全に入れ替わっている状態である(三〇七ページ)」。対称の方も、後半で得られた一六語中、前半と共通しているものは、八語に過ぎない。この両者の間のズレについては、前半部で採集された「おまへさん(おまへはん)・おめへさん」と後半部に見られる「おまへさま・おめへさま」をとりあげて、「それぞれ別の待遇価値を持った語(三〇八ページ)」と指摘するに止まっている。しかし、ここに見られる、多様な人称代名詞群の対立と照応の姿は、人情本に登場する男女の、様々な位相差や多彩な人間模様を反映するものにはかならない。その意味で、前半部・後半部を総体的に見わたした見解がほしかったように思う。人称代名詞に続く、待遇表現の論考は、これも前半・後半に分かれ、前半部は、いわゆる「梅暦もの」を資料とし、後半部は「仮名

文章娘節用」から「閑情末摘花」にいたる六編の人情本をとりあげ、「待遇性の動詞・助動詞」を考察したものである。のちの東京語、さらには標準語につながる表現形式が形成されてくる時期であり、数千にのぼる用例を使用集団という観点から分析した、詳細なデータは、現代敬語を考察するうえで、きわめて有益なものである。ちよつと残念なのは、データが終止形中心にまとめられてしまっているため、たとえば「致ス・参ル・申ス」などについて、衰退に向っている「致ソウ・参レ・申サヌ」などの形と、のちのちまで用いられている「致シマセン・参リマシヨウ・申シアゲル」のような形との勢力分布がはつきりととらえにくいことである。たとえば「下サル」の場合、今日もつともよく用いられる「下サイ」の形については、前半の「梅暦もの」の記述の中に「この語を男性が用いた場合が四例あるが、三例が『下せへ』で、一例が『下さい』である。(三七七ページ)」と出てくるだけで、全部で一四二の用例に「下サイ」の形が、どのくらい現われるのか、あるいは「下サレ」の形は見られないのか、といった情報が得られない。しかし、「下サイマス」と「下サリマス」については、「くマス」の連接形がとりあげられているので、「下サリマス」の形は、前半の「梅暦もの」には一例もなく、後半部に見られる十二例中十一例までが「仮名文章娘節用」と「清談若緑」に登場する斯波藩の本身・仮名家の一族につらなる人々の用例だという興味深い事実が明らかになっている。「下サル」が「くマス」に連接している例は七十六例(三七七ページ)ということだから、「下サリマス」の形は、人情本においては、きわめて稀で、その使用はほぼ武家の男女に限られるということがわかる。それならば「下サイマセ」と「下サイマシ」はどうか、ということになると、これ

は終止形にまとめられてしまっているもので、その競合の姿は浮かびあがってこない。

膨大な用例が整理されているので、あれこれと、つい欲が出てしまいが、著者の手もとの用例が、いつの日か、なまの形で開陳されることを願ってやまない。

四

第二章は、「一、体言の敬語法」「二、代名詞とその変遷」「三、副詞・連体詞・助詞に関わる表現上の問題（現代語）」「四、推量の助動詞（古語）」の四つの節からなる。最初の「体言の敬語法」は、指示代名詞・人称代名詞・接辞などのもつ「敬意を表わす機能」を説いたものである。内容は、「現代語の場合」「後期江戸語の場合」に分かれ、本文は一般向きの啓蒙的な説明だが、くわしい補注がつけられている。この補注の中に示されている、各種の国語辞書や敬語の用法辞典・用例辞典類の解説の対比は、たいへん興味深い。たとえば「あなた」について、八種の辞書類の記述がとりあげられているが、その間の「敬意」の扱いの振幅に驚かされる（四〇六〜四〇七ページ）。

つぎの「代名詞とその変遷」は、各種の文法書における代名詞のとりえ方を検討したうえで、その性格を考察し、さらに、史的展開の姿を説きあかしたものである。たとえば、「あなた／わたし」「僕／君」「俺／お前」「俺／貴様」といったセットのニュアンスの異同を、童謡・演歌・歌謡曲・軍歌の例（四五〇〜四五二ページ）で説明するなど、個々の段落（項）の説は工夫されていて分かりやすいが、段落（項）相互の関係がとらえにくいように思われる。どこかで表にでも

整理して示しておいてもらえるとありがたいがたかった。

「三、副詞・連体詞・助詞に関わる表現上の問題（現代語）」は、まず、副詞については、いわゆる陳述副詞を中心に、呼応の現象が扱われている。連体詞では「この・その・あの」の類がとりあげられ、助詞については「ニ・ヘ」「ホド・バカリ」「カラ・ノデ」などが、近代の文学作品の用例によって説かれている。全体に、文法書や文法辞典などの説く、いわば正統的な用法に対して、例外ないしは破格の用例を念入りに集めて解説する記述のしかたである。副詞「トテモ」の破格用法の例の中に、大正時代の歌謡曲「月は無情」に出てくる「あの子よい娘だ、美人だ」^{トテモ}が引かれていたり（四七九ページ）、「全然」の例に西田幾太郎の『善の研究』の「全然物と一致したる処に、…」というが出てきたり（四八八ページ）、こうした思いがけない用例に出くわす楽しみを与えてくれる。気になったのは、助詞の「ニ」と「ヘ」や「カラ」と「ノデ」についての用例で、これらの助詞の使い分けは、明治と現代、東日本と西日本では、その様相がかなり異なるので、用例の作家の生育地や世代についての配慮がほしいところであった。伊藤左千夫・長塚節・国木田独步・林芙美子・井上靖らの作品からの用例には、時代的な違いや地域差のようなものを感じられる。

この章の最後の「四、推量の助動詞（古語）」は、「ム・ラム・ケム」をめぐる論であるが、口語の「ウ・ヨウ・ダロウ」の成立についても触れられている。「ム・ラム・ケム」については、先行研究を手引きよく紹介しつつ、これらの助動詞の意味・用法が丁寧に説かれている。筆者としては、「つけたり」のつもりだったかもしれないが、「ヨウ」の成立・「ダロウ」の発生をめぐる論は、用例の分析に基づ

いて説得力のある展開である。「ウ」から「ヨウ」が生じた過程は、ほぼ先行研究を踏襲し、その確立時期については、江戸時代後期江戸語とする(五二二ページ)。これは、江戸時代前期上方語の用例を、どう評価するかであるが、少なくとも、前期上方語の用例には、室町時代のように拗音をもって発音されたとは考えにくいものが見られる点を重視すれば、すでに前期上方語において分離・独立していたと見た方が妥当なように思われる。本書では、前期上方語では、まだ上接の動詞が限られている(五二〇ページ)点を重視するわけだが、江戸時代後期江戸語の場合は、五二二ページにあるように、すでに推量専用の「ダロウ」が成立している。そして、推量は「ダロウ」、意志・勧誘は「ヨウ」といった分化が生まれはじめるので、むしろ「ヨウ」の用法が限られはじめた時期ともいえるように思うが、どうであろうか。いずれにしても、室町時代から江戸時代前期上方語・後期江戸語にかけての「ヨウ」の展開を論じるには、「ヨウズ・ヨウズル」との関係が問題になるわけだが、この形の消長がいまひとつはつきりしない(五三三ページ)ことが、「ヨウ」の成立論に影を落としていることはまちがいない。本書では、この問題には、あまり立ち入っていないが、五二二―五二三ページに挙がっている用例を見ると、前期上方語の用例も江戸語の用例も、やや古風な時代があったことばに用いられたもののようなので、この形は、すくなくとも江戸時代には、普通には使われなかったものとしていいように思われる。

五

第三章の「語誌あれこれ」は「一、江戸語五題」と「二、外来語

に見る発音・表記のゆれ」の二つの節に分かれ、前者は「オテンバ・キザ・チャカス・デッチ・ワンパク」の語源・語史を考察したもの。後者は「ハンケチとハンカチ／インキとインク」といった、外来語の発音と表記の問題をとりあげたものである。

個々の論を紹介するスペースはないが、「江戸語五題」で扱われている五語は、いずれも、紛々たる諸説を背負ったものであり、なかなか一筋縄では、その語誌を明らかにすることが困難な単語ばかりである。そうした状況の中で、出典・用例・先行研究、さらには方言までも踏まえて、現段階で解明しうる限界を示しているといつてよい。これを超えるとしたら、近年、あいついで刊行されている、大部の方言辞典や、各地の方言書が有力なデータとなるのではないかと思う。上方語についての辞書類は別として、この論が執筆された当時は、まとまったものとしては『全国方言辞典(東条操)』しかなかったようなので、もっぱらこれに拠っている(五五〇・五五一・五六六・五七一・五七二・五八〇ページ)が、近年の方言研究の成果を活かして、さらなる充実が期待される。

「外来語に見る発音・表記のゆれ」の方は、有名な芥川龍之介の『手巾』の読みとルビの問題にはじまり、明治以降の新聞記事・辞書・小説・評論に見られる表記のユレを追う。ユレとしてとりあげられた外来語は「ハンケチ／ハンカチ」のほか「ワイヤ／ワイヤー」「キャンデー／キャンデー」「エキストラ／エクストラ」「キス／キッス」「クレオン／クレオン」「カンマ／コンマ」「アルミニウム／アルミニウム」「プラットホーム／プラットフォーム」「バイオリン／ヴァイオリン」「ウイスキー／ウイスキー／ウヰスキー」など。また、明治期の文献に見られるものとして、「ピアノ／ピヤノ」「カナリア／

カナリヤ」「ダイアモンド／ダイヤモンド」「ピアーホール／ピーヤホール」「シガー／シガール」「リーダー／リードル」「サイダー／サイダ」「ポイイ／ポイ」「コロツケ／コロケツト」「ポケツト／ポツケツト」「カフス／カウス」「ガラス／グラス」「キャベツ／キャベージ」「キャラコ／キャラコ」「キャビン／ケビン」「ステーション／ステーション」「フラフ／フラホ」「シャツポ／シャツポ」は出典つきで扱われ、特に「インキ／インク」については、くわしい考察が加えられている。

単なるユレに止まらず、原籍(母語)の異なるものとして、「アミバ(英)／アメーバ(独)」「イマージュ(仏)／イメージ(英)」「カード(英)／カルタ(葡・西)／カルテ(独)」「カソリック(英)／カトリック(蘭・独)」「サンチ(仏)／センチ(英)」「シアター(英)／テートル(仏)」「セレナーデ(独)／セレナード(仏)」「ターフル(蘭)／テール(英)」「テナー(英)／テノール(独)」「ナンバー(英)／ナンバー(仏)」「フラッグ(英)／フラフ・フラホ(蘭)」「マヌカン(仏)／マネキン(英)」「マンテル(蘭)／マント(葡・仏)」「リッター(英)／リットル(仏)」なども扱われ、さらに、いわゆる二重語(double)の「ストライキ／ストライク」「カタン(糸)／コットン(ペーパー)」「スティック／ステッキ」「アイアン／アイロン」「キャビネ／キャビネツト」「シート／シート」「チェック／チッキ」「トラック／トロッコ」の類にも及んでいる。

したがって、外来語の発音・表記の考察というよりは、近代日本語の外来語研究ともいうべき内容である。一方、表記という面からいえば、近代のカタカナ表記の実情というか、近代語の表記におけるカタカナの生態との関連にも目を向けてはしかなかった気がする。少

なくとも昭和のはじめまでは、公用文をはじめ正式文書はカタカナ漢字まじり文が普通だったわけだから、カタカナによる表記法そのものの規範性というか、カタカナ表記のルールが、現代とは比較にならないほど、安定していたのではないかと考えられる。その中であって、外来語のカタカナ表記や、そのユレがどのように位置づけられるのか、この点も、一つの大きな問題ではないかと考えられる。

本書でとりあげられているカタカナ表記の中にも、「ウキスキー」「ポイ(boy)」「ケビン」「チッキ」など、あるいは当時のカタカナ表記の傾向の反映とも思われるものが見られる。もちろん、カタカナ表記のルールないしは慣習も時代によって変化しているので、「ウキスキー」や「ポイ」のような表記が、原音の描写を意識したものなのか、その時期のカタカナ表記の習慣に基づくものなのか、あるいは、ごく個人的ないしは狭い分野で行なわれたものなのかを見きわめることは、たいへんむずかしい。しかし外来語のカタカナ表記の問題としては、この点が解明されると、また、ひと味ちがった論が展開されていくように思う。

池上さんの論考を離れた話になってしまったが、話を本書の論考にもどすと、この論の末尾に、明治以降の文学作品と国語辞書に見られる「handkerchiefの日本語」と題する、詳細な二つの表がついている。いずれも、たいへんな力作で、一見して、明治から昭和にいたる、このことばの生態が読みとれるが、ここにでてくる「手巾／半布／半巾／手拭／鼻拭／手帽／白巾／汗巾／絹巾／帕子／帕布／手帕」といった漢字表記もまた、興味をそられるものである。

以上、六四〇ページの大著をかけ足で見てきたが、ここに収録さ

れている論考の中で、早い時期のものは一九五三年（昭和28）に発表されたものである。はじめにも紹介したように、発表当初の原型を保つ形で収録されたことなので、発表時期を考え合わせると、マトはずれなことを述べたのではないかと危惧している。その点はお許しいただいて、最後に、多くの貴重な用例を教えていただいたことを、何よりも感謝して筆をおくことにする。

なお、誤植については、著者の手もとに正誤表が用意されているとのことである。

（平成八年七月三十日発行 東苑社刊 A5判 六四〇ページ 本体価格二〇〇〇円）

——学習院大学教授——

（平成十年三月三日 受理）